

明治期初期社会主義におけるパンフレット出版前史

— 堺利彦と由分社にとっての「小冊子」戦略

新藤雄介

本論文は、明治期の初期社会主義を担った堺利彦と由分社に焦点を当て、平民社結成前後の出版物と演説にどのような変化が生じたのかを明らかにするものである。分析にあたっては、平易さや研究といった要素がどのように認識されていたのかに着目した。

平民社以前の『労働世界』の人々は幻灯を使用した演説を行い、労働者向けの叢書も構想したが、社会主義の取り締まりの強化に伴い、不完全に終わった。堺利彦は自ら出版社（由分社）を立ち上げ、面白さや通俗平易さを重視した本や雑誌の発行を行った。社会主義ユートピア小説の抄訳や平民文庫の刊行を行い、雑誌や新聞の連載を単行本化した。

平民社解散後には、「一銭本」・「二銭本」をつくり安く平易なものを供給する一方で、『社会主義研究』を創刊し、「学研究」としての社会主義を行った。堺は演説における「政談／学術」という区分を、出版物における「運動／学術研究」へと移行させ拡大した。